

薫と大君の物語

— 宇治十帖論のために —

—

宇治十帖、橋姫巻は「そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり」(橋姫⑤一一七)と、不遇な八の宮の半生を語り出すところから開始される。政争に巻き込まれた挙句に人々から見放された八の宮は、世間に背を向け仏道へと気持ち傾けていくのだが、しかし姫君たちが絆となり出家を思い切れないでいる人物として語り出されてくる。

A いはけなき人々をも、独りはぐくみたてむほど、限りある身にて、いとをこがましう人わるかるべきこと、と思したちて、本意も遂げまほしうしたまひけれど、見ゆづる人なくて残しとどめむをいみじく思したゆたひつつ、年月も経れば、おのおのおよすけまさりたまふさま容貌のうつくしうあらまほしきを、明け暮れの御慰めに、おのづからぞ過ぐしたまふ。

(橋姫⑤一一八〜九)

ここに用いられた「見ゆづる」という語は、当該例のように「見ゆづる人なし」という言い回しで、後事を託すべき人物がない場合

吉田幹生

に用いられることが多い。⁽¹⁾ それゆえ、宇治十帖においても、姫君たちの後見問題が物語展開上の重要事項として浮上してくることが予想される。つまり、姫君たちへの愛着と出家への思いとに揺れる八の宮が「見ゆづる人」を見つけることで安心して仏道修行に専念するようになる、という展開である。

おそらく、北の方と死別し女房たちにも去られた八の宮にとって、そのための最も有効な手段は、宮自身が再婚をし、姫君たちの面倒を見てくれる親類縁者を確保することであつたと思われる。しかしながら、あくまでも俗世に背を向けることで自身の誇りや宮家の名誉を守ろうとする八の宮は、決して再婚を潔しとしないのであつた。⁽²⁾ やがて八の宮は、自邸が焼亡したことを機に宇治に隠棲することになるが、姫君たちを伴い宇治に移住するということは、彼女たちにも生涯独身を貫きその地で没することを求めるものであつたと推測される。後に宿直人が「人聞かぬ時は、明け暮れかくなむ遊ばせど、下人にて、都の方より参り立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず。おほかた、かくて女たちおはしますことをば隠させたまひ、なべての人に知らせたてまつらじと思しのためはするなり」

(橋姫⑤二三八)と述べているのは、そのような八の宮の方針を反映したものであろう。しかし、それで先述の後見問題が解決したわけではない。阿闍梨に対して「心ばかりは蓮の上に思ひのほり、濁りなく池にも住みぬべきを、いとかく幼き人々を見棄てんうしろめたさばかりになん、えひたみちにかたちをも変へぬ」(橋姫⑤二二七)と語っているように、依然として姫君たちへの愛着心は燻ったままなのである。

八の宮が薫と知り合ったのは、そのような時であった。それゆえ、薫を「見ゆづる人」として姫君たちを託すという展開が期待されるのだが、物語はここで一つの錯誤を仕組むことになる。⁽³⁾阿闍梨から八の宮の噂を聞いてその内なる苦悩を知り「うしろめたく思ひ棄てがたく、もてわづらひたまふらんを、もししばしも後れんほどは、譲りやはしたまはぬ」(橋姫⑤二二九)と発言したのは冷泉院であり、八の宮の抱える執着に無関心な薫は「俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに」(橋姫⑤二二八)と、それを自らのあるべき理想の境地として受け取るのであった。一方の八の宮も、薫を「心恥づかしげなる法の友」(橋姫⑤二三三)と認識することで、好色心のない奇特な青年として薫を理想化してしまう。そしてその結果、八の宮は薫と姫君たちの接近を許容すると同時に、姫君たちの結婚相手(狭義の「見ゆづる人」としては考慮の埒外に置くことになるのである。自身の留守中に薫が訪問しその後手紙が届いたことを聞いた八の宮は「何かは。懸想たちて、もてないたまはんも、なかなかうたてあらん。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむ後もなど、

一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」(橋姫⑤一五三)と述べるが、死後においても大君と弁によってそれぞれ・この人(＝薫)の御けはひありさまの疎くはあるまじく、故宮も、さやうなる心ばへあらばと、をりをりのたまひ思すめりし
かど：

・この殿(＝薫)のさやうなる心ばへものしたまはまししかば、一ところをうしろやすく見おきたてまつりて、いかにうれしからましと、をりをりのたまはせしものを。
(総角⑤二四九)

と回想されているように、薫の「心ばへ」を並の若者とは異なるものと把握するがゆえに信頼を置く一方で、またそれゆえにこそ婿がねとして遇することを躊躇するのであった。

このように考えてくる時、問題になるのは次の場面の解釈であるう。

B「亡からむ後、この君たちをさるべきものたよりにもとぶらひ、思ひ棄てぬものに教まへたまへ」などおもむけつつ聞こえたまへば、「一言にてもうけたまはりおきてしかば、さらに思ひたまへ怠るまじくなん。世の中に心をとどめじとはぶきはべる身にて、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なさになむはべれど、さる方にてもめぐらひはべらむ限りは、変はらぬ心ざしを御覧じ知らせんとなむ思ひたまふる」など聞こえたまへば、うれしと思いたり。
(権本⑤一七九)

八の宮が薫に対して姫君たちのことを話題にしている場面だが、類似の場面は橋姫巻にも設定されていた。しかし、橋姫巻の方は前引

した阿闍梨への発言と同じく、八の宮が自身の悩みを法の友である薫に打ち明けたという体のものであり、「落ちあぶれてさすらへんこと、これのみこそ、げに世を離れん際の絆なりけれ」(橋姫⑤一五九)と述べているように、内容も死後の落魄が気がかりだというもののである。それゆえ、ここに婿がね云々を考える必要はあるまい。それに対して、Bはより積極的に薫への依頼を述べたものとなっており、八の宮が薫に姫君との結婚を依頼しようとした場面と解されることの多いところである。はたして、Bにおける八の宮の心情はどのように読み解かれるべきものなのか。

同じ年の二月、匂宮一行が宇治川の対岸に中宿をした際、久しぶりに華やかな宮中の雰囲気に接した八の宮は、自身の過去を回想するところから「姫君たちの御ありさまあたらしく、かかる山ふところひきこめてはやまずもがな」(権本⑤一七二)との思いを抱くようになる。ここで八の宮が心配しているのは、姫君たちの落魄ではなく彼女たちが宇治で暮らすことそれ自体である。それゆえ、宇治での生活の経済的援助者ではなく、姫君たちを宇治から都へ連れ戻してくれる人物が求められることになる。右に続けて、八の宮が「宰相の君(＝薫)の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひよるまじかめり、まいて今様の心浅からむ人をばいかでかは、など思し乱れ」(権本⑤一七二)るのは、そのような脈絡から出た心情であろう。この心内叙述は細かい点で解釈が揺れているが、右の推測から「近きゆかり」として見たがっているのは八の宮だと考えられること、「思ひよる」と無敬語であること、薫と

「今様の心浅からむ人」とを比較した構文であることなどから、「薫は同じことなら(経済的援助者としてではなく)婿として見たいような方だが、(仏道修行に熱心ゆえ)そういう期待を掛けられない、ましてや現代風の心浅い人には、なおさら期待などできようはずもない」という意に解すべきものと考ええる。つまり、八の宮はこの時はつきりと薫を婿がねとして意識したのだが、同時にそれを叶わぬ願いとも考えているということである。しかし、これで八の宮の婿探しが終わったわけではない。匂宮一行が帰京した後も、

C 思すさまにはあらずとも、なのめに、さても人聞き口惜しかる

まじう、見ゆるされぬべき際の人の、真心に後見きこえんなど
思ひよりきこゆるあらば、知らず顔にてゆるしてむ、一ところ
一とこる世に住みつきたまふよすがあらば、それを見ゆづる方
に慰めおくべきを、さまで深き心につづねきこゆる人もなし。

まれまれはかなきたよりに、すき事聞こえなどする人は、まだ
若々しき人の心のすさびに、物詣での中宿、往き来のほどのな
ほざり事に気色ばみかけて、さすがに、かくながめたまふあり
さまなど推しはかり、侮らはしげにもてなすは、めざましうて、
なげの答へをだにせさせたまはず。(権本⑤一七七、八)

と考えをめぐらすのである。だが、言い寄ってくるのは「今様の心浅からむ人」の類ばかりであり、八の宮の条件に合いそうな男は見当たらならしい。この時八の宮に残された選択肢は、薫の「例の若人に似ぬ御心ばへ」を頼りに改めて彼に経済的援助を期待するか(その場合「落ちあぶれてさすらへんこと」は回避される)、薫の気

持ちが変わって「真心に後見きこえん」と言い寄ってくるのを待つか（その場合「かかる山ふところにひきこめてはやまずがな」という願いは叶う）の二つであったかと想像される。

前掲Bは、そのような叙述に続く七月の場面である。久しぶりに薫と再会した八の宮は、死期が近いこともあり薫に姫君たちのことを託そうと饒舌になるのだが、そこに「この君たちをさるべきものたよりもとぶらひ」とあることから推せば、ここで八の宮が選んだのは前者の方法であったと推測される。もっとも、この八の宮の発言は「などおもむけつつ」と受けられているので、八の宮が後者の真意を伏せて薫の口から結婚受諾の言葉を引き出そうとしているとも解し得るが、その場合は「一言にてもうけたまはりおきてしかば」と橋姫巻での約束と同内容という前提での薫の発言（そこには明確な結婚受諾の言葉もない）を聞いて「うれしと思いたり」と続くことの説明がつかない。やはり、薫を「心恥つかしげなる法の友」と信じる八の宮は、この時点で薫を「見ゆる人」の候補から外し死後に取り残される姫君たちの宇治での生活の援助者たることを委託したのだ、と読み解くべきであろう⁴。

また、この後八の宮の詠んだ「われ亡くて草の庵は荒れぬともこのひとはかれとぞ思ふ」（椎本⑤一八二）という和歌についても、「ひとこと」に「言」と「琴」が掛けられているのはよいとして、歌の主眼は「琴」の方であったと考えるべきではないか。

「言」にせよ「琴」にせよ「かる」と表現する例は珍しく、そのため下二句の意が取りにくいのだが、ここは直前の琴の演奏や「かば

かりならし（馴らし・鳴らし）そめつる残りは」（椎本⑤一八二）云々という発言を踏まえ、私が亡くなってこの草庵が荒れはてしまつたとしてもこの琴までもが枯れてしまふ（あるいは、その音色までもが吸れてしまふ）ことはないと思います（だから自分の死後も琴を目当てに訪ねて来てほしい）と詠むことで、暗に死後の姫君のことを託しているのであり、結局前掲Bの「亡からむ後、この君たちをさるべきものたよりもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ」と同内容の訴えをしているのだと思われる。

この点は、姫君や女房たちへの訓戒とも一致する。八の宮は「おほろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」（椎本⑤一八五）「かかる際になりぬれば、人は何と思はざらめど、口惜しうてさすらへむ、契りたかじけなく、いとほしきことなむ多かるべき」（椎本⑤一八六）と言い置いて山寺に向かうのだが、これらを総合して考えれば、「おほろけのよすがならで」という点に一縷の望みは託しているものの、姫君たちが結婚して宇治を去るということは断念し、せめてこの地で宮家の誇りを保つたまま生涯を終てほしいというのが八の宮の最終的な思いであったと推定される⁵。薫を婿にとの願いは確かにあったが、その「心ばへ」を過度に評価する八の宮は、とうとう経済的物質的援助者という以上のものを薫に期待し得なかつたのである。

とはいえ、薫の受け止め方は必ずしも八の宮の思惑通りではなかつたらしい。Bに続く叙述で、「さばかり、御心もて、ゆるいたまふことのさしも急がれぬよ」（椎本⑤一八三）と考えているよう

に、薫はこの時の対面から八の宮に結婚を許可されたものと受け止めていた。しかし、それが八の宮の真意に即したものでないことは前述の通りである。むしろ、問題はそう受け止めてしまふ薫の問題として考察されるべきであろう。

二

薫については、匂兵部卿巻に

D中将は、世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはんはつつましくなど思ひ棄てたまふ。さしあたりて、心にしむべきことなきほど、さかしだつにやありけむ。人のゆるしなからんことなどは、まして思ひよるべくもあらず。(匂兵部卿⑤二九)

と記されていたように、仏道を指向するところから現世執着の原因となる色恋沙汰には関心を示さない人物として設定されている。しかし、すぐさま傍線部のような感想が差し挟まれてくるように、薫の思い通りに事が運ぶかについてははなはだ心もとない。むしろ、道心と恋心の対立を抱えた薫が、次第に恋の執着に絡めとられていく様を描くところに物語の関心が向いていると考えるべきであろう。宇治の八の宮邸に通うようになった薫は、襖を隔てた姫君の存在を「すき心あらん人は、気色ばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかごとゆかしうもある御けはひなり」(橋姫⑤一三三)と感じ取る。これは姫君への興味関心以外のなにもでもない

く、薫にも「すき心あらん人」と同様の情念が潜んでいること示すものだと考えるが、しかし当の薫本人は「されど、さる方を思ひ離るる願ひに山深く尋ねきこえたる本意なく、すきずきしきなほざり言をうち出であざればまんも事に違ひてや、など思ひ返して」(橋姫⑤一三三) 仏道修行に励むのであった。このように、自らを「すき心あらん人」とは異なる道心深い人物とみなす薫は、自らの内に潜む恋心を抑制し、その存在を容認しようとはしない人物として宇治に登場してくる。それゆえ、三年後の垣間見の場面でも、「我はすきずきしき心などなき人ぞ」(橋姫⑤一三八)「世の常のすきずきしき筋には思しめし放つべくや。さやうの方は、わざとすすむる人はべりともなびくべうもあらぬ心強きになん」(橋姫⑤一四二) 三) などと発言することが可能となるのであろう。また、薫は大君に対し「つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせどころに頼みきこえさせ、また、かく世離れてながめさせたまふらん御心の紛らはしには、さしもおどろかさせたまふばかり聞こえ馴ればらば、いかに思ふさまにはべらむ」(橋姫⑤一四三)と述べているように、大君を世の無常を語り合える存在として、恋愛を超越した関係を求めていくことになるのだが、それも前述のような自己規定の延長線上に出てくるものだと思う。

しかし、そのような薫を、物語は容赦なく恋の世界に引きずり込んでいく。

E昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、かならずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけんと憎く推

しはからるるを、げにあはれるものの隈ありぬべき世なりけり」と心移りぬべし。(橋姫⑤一四〇)

F 思ひしよりはこよなくまさりて、をかしかりつる御けはひども面影にそひて、なほ思ひ離れがたき世なりけりと心弱く思ひ知る。
らる。(橋姫⑤一五一)

Eは垣間見最中の、Fは帰京後の薫の心内叙述である。ここに「なりけり」という気づきの語法や自発表現が認められるように、前述した薫の意識とは別に、いよいよ内なる恋心が動き始めることになる。見方を変えて言えば、薫の内部には、道心に由来する許容される「恋心」(恋愛を超越した関係を求めるものだが「」を付して「恋心」としておく)と、内なる情念ともいべき許容されざる恋心の二種が併存しているのである。吉井美弥子氏は、敬語の有無という視点から薫に関する叙述を分析し、薫に対する無敬語表現が前掲E Fのように姫君たちへの関心を示す部分に多いことから「述べてきたように、橋姫巻における薫をめぐる(語り)は、敬語のない(語り)が、通常の(語り)を突き破って、それまでの薫のありようと齟齬をきたすような薫自身の自己矛盾した状況を浮かび上がらせている」(橋姫巻においては、その後の新たな展開が、薫が出生の秘密を確認したことによってもたらされるのではなく、むしろ自己矛盾した状況の中で浮かび上がった薫の姫君たちへの関心の中にこそ孕まれているということ)を、まさしく(語り)そのものが示しているのだといえよう」と把握したが、本論の主旨に引き付けて言えば、対外的な自己規定に基づく会話文と薫の心中を直叙する心

内語とを織り交ぜながら、物語はやがて薫の心内で胎動し始めた後者の恋心が新たな展開を紡ぎ出していく様を描き出していくということである。

右のような視点から前掲Bに続く問題の叙述を捉えるならば、こは、八の宮との対話時には「世の中に心をとどめじとはぶきはべる身」と自己規定していた薫の内側で、実はそれが「人のゆるし」として捉えられていたことを語る場面だと読み解くべきではないか。G世の常の懸想びてはあらず、心深く物語のどやかに聞こえつものしたまへば、さるべき御答へなど聞こえたまふ。三の宮いとゆかしう思いたるものをと心の中には思ひ出でつつ、わが心ながら、なほ人には異なりかし、さばかり、御心もて、ゆるいたまふことのさしも急がれぬよ、もて離れて、はた、あるまじきこととはさすがにおぼえず、かやうにてもものをも聞こえかはし、をりふしの花紅葉につけて、あはれをも情をも通はずに、憎からずものしたまふあたりなれば、宿世ことにて、外ざまにもなりたまはむは、さすがに口惜しかるべう領じたる心地しけり。(権本⑤一八三)

「世の常の懸想びてはあらず」云々とあるように、薫はここでも道心を前面に押し出して姫君と対座している。恋心とは無縁なそのようなあり方を薫自身も「なほ人に異なりかし」と捉えはするのだが、しかしすぐさま「さすがに」と繰り返されているように、姫君との結婚を縁遠いものと思うや否やそれを打ち消したい衝動にも駆られてしまうのである。前掲Dに「人のゆるしなからんことなどは、ま

して思ひよるべくもあらず」と語られていただけに、死後の面倒を委託されたことを「人のゆるし」と理解する薫は、姫君との結婚の可能性を排除することができずに、「領じたる心地」を抱くことになるのである。

しばしば指摘されるように、これは、八の宮の死を契機として薫と姫君たちとをいよいよ近づけていくための伏線でもあろう。出生の秘密保持のためにも足繁く宇治に通う薫はこの遺言を梶子にさらなる交誼を求めていくのだが、「御心地にも、さこそいへ、やうやう心静まりて、よろづ思ひ知られたまへば、昔ざまにても、かうまで遙けき野辺をわけ入りたまへる心ざしなども思ひ知りたまふべし、すこしゐざり寄りたまへり」(榎本⑤一九七〜八)「雪もいとところせきに、よろしき人だに見えずなりにたるを、なのめならぬけはひして軽らかにものしたまへる心ばへの、浅うはあらず思ひ知られたまへば、例よりは見入れて、御座などひきつころはせたまふ」(榎本⑤二〇五〜六)などと記されるように、大君はあくまでも恋愛関係を排除したところで薫と対面することになる。これは、前述したような「恋心」を求める薫の要求には合致するものであったが、しかし他方の恋心を満足させるものではなかった。むしろ、八の宮の死の翌年正月に大君と対面した際に「かやうにてのみは、え過ぐしはつまじと思ひなりたまふも、いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なりけりと思ひぬたまへり」(榎本⑤二〇六)と自覚する通り、大君との距離が近づくとつれ薫はますます恋心を強めていくのである。しかし、物語は「いとうちつけなる心」の暴走を許さない。薫の

「つららとち駒ふみしだく山川をしるべしがてらまつやわたらむ」(榎本⑤二〇九)の歌に対して「思はずに、ものしうなりて、ことに答へたまはず」(榎本⑤二一〇)と反応するように、薫の恋心が前面に出てくると大君は反射的に身を固くしてしまう。そして、薫自身も「事にふれて気色ばみ寄るも、知らず顔なるさまにのみもてなしたまへば、心恥づかしくて、昔物語などをぞものまめやかに聞こえたまふ」(榎本⑤二一〇)と、それ以上の無理強いを回避してしまうのであった。ここに、

日まめやかなる人の御心は、またいとことなりければ、いとどのどかに、おのがものはうち頼みながら、女の心ゆるびたまはざらむ限りは、あざればみ情なきさまに見えじと思ひつつ、昔の御心忘れぬ方を深く見知りたまへと思す。(榎本⑤二二五〜六)

という、大君の態度軟化すなわち「心ゆるび」を待つ戦略が浮上してくることになる。

このような薫の態度は、総角巻で大君のもとに忍び込んだ際の実事なき逢瀬の場面でも「御心破らじと思ひそめてはべれば」(総角⑤二三四)「かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふをりもありなむと思ひわたる」(総角⑤二三五)「この御心にも、さりともしこしたわみたまひなむなど、せめてのどかに思ひなしたまふ」(総角⑤二五六)と繰り返し確認されていく。しかし、はたして大君が「心ゆるび」することは、あり得るのだろうか。物語はこのあたりから、話題の焦点を薫から大君へと緩やかにずらしていくことになる。所謂結婚拒否の問題である。

三

とはいえ、「心ゆるび」の問題には、早々に結論が出されることになる。総角巻に入ると、物語は中の君の結婚問題に思案する大君の姿を点描し始めるのだが、薫への発言中に見られる大君の「さるは、すこし世籠りたるほどにて、深山隠れには心苦しく見えたまふ人の御上（＝中の君）を、いとかく朽木にはなしはてずもがな」（総角⑤二二六）という願望は、前引した「姫君たちの御ありさまあたらしく、かかる山ふところにひきこめてはやまずもがな」という八の宮のそれと同質のものであろう。また、右に用いられる「心苦し」という把握も、既に八の宮に「御衣どもなど萎えばみて、御前にまた人もなく、いとさびしくつれづれげなるに、さまざまいとらうたげにてもしたまふをあはれに心苦しう」（橋姫⑤一二三）四）「ねびまさりたまふ御さま容貌ども、いよいよまさり、あらまほしくをかきしも、なかなか心苦しう」（椎本⑤一七六）などと用いられていたものであった。つまり、大君は、八の宮の死を契機として、将来を案じられる存在から父親に代わって中の君の将来を案じる存在へと変化してくるのであり、弁が薫に語っているように、薫と中の君との結婚を考え始めるようになるのである。

薫との実事なき一夜を大君が過したのは、そのような時であった。確かに、この時の薫と大君との間には何がしかの共感が生じたと思われる。しかしそれは、「常なき世の御物語に時々さし答へたまへるさま、いと見どころ多くめやすし」（総角⑤二二七）「何とはな

くて、ただかうやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば、やうやう恐ろしさも慰みて」（総角⑤二二七）とされているように、あくまでも「恋心」を求める次元での共感関係であって、大君が薫の恋心を受け入れたということではない。大君は後者の薫の言葉に「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こええば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」（総角⑤二三八）と答えているように、「隔て」を介しての関係を望んでおり、決して「心ゆるび」したわけではないのである。むしろ、薫への共感と親代わりの立場とを天秤にかけて、大君は薫との結婚を断念する道を選択することになるのであった。

I この人の御けはひありさまの疎ましくはあるまじく、故宮も、さやうなる心ばへあらばと、をりをりのたまひ思すめりしかど、みづからはなほかくて過ぐしてむ、我よりはさま容貌も盛りにあたらしげなる中の宮を、人並々に見なしたらむこそうれしからめ、人の上になしては、心のいたらむ限り思ひ後見てむ、みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ、この人の御さまの、なのめにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥づかしげに見えにくき気色も、なかなかいみじくつつましきに、わが世はかくて過ぐしはててむ、と思ひつづけて、音泣きが、ちに明かしたまへるに、なごりいとなやましなければ、中の宮の臥したまへる奥の方に添ひ臥したまふ。（総角⑤二四〇）一

大君が薫との結婚を拒否する要因には様々なものが指摘されており、単一の理由に帰着させることは困難だが、「心ゆるび」の問題を基点に考えれば、薫が「恥づかしげに見えにくき気色」であることが拒否の大きな理由ということになる。それは、自分と薫とは釣り合わないと思えるからであり、なればこそ「我よりはさま容貌も盛りにあたらしげなる中の宮」を勧めることにもなるのである。そして、自らは中の君を「心のいたらむ限り思ひ後見」することによって満足しようというのである。確かに、傍点を付したような言い回しに、薫への恋心を封じ込めようとする大君の姿を看取することは可能である。しかし、物語は大君の心の揺れ——薫への思いを断ち切ることとをめぐって揺れる女心——を描くことには向かわない。むしろ、前記のように早々に薫との結婚を断念して代わりに中の君と結び付けようとする大君と、あくまでも大君の「心ゆるび」を待ち続ける薫との、中の君をめぐる攻防に焦点を絞り込んでいくことになる。それを「思ひかまふ(思しかまふ)」という語に即して見てみよう。この語は物語中に十一例あり、玉鬘の九州脱出計画(玉鬘巻)や八の宮の立坊計画(橋姫巻)などを語る際に用いられているが、そのうち半数近い五例が総角巻に集中している。この語が最初に用いられるのは八の宮の喪が明けた後に薫が訪れた場面で、「せめて恨み深くは、この君をおし出でむ、劣りざまならむにてだに、さても見そめてば、あさはかにはもてなすまじき心なめるを、まして、ほのかにも見そめてば慰みなむ(中略)と思し構ふるを」(総角⑤二四四)と、前掲Ⅰのような決意を固めた大君は、それでも薫が

迫ってくるようなら中の君を差し出そうと考えている。しかし、この計画を中の君や弁に打ち明け相談するものの、はかばかしい返答は得られず逆に発言内容の不合理さを衝かれ反対されてしまう。対する薫は、弁経由で大君の頑なな態度を知り、「さらば、物越しなどにも、今はあるまじきことに思しなるにこそはあなれ。今宵ばかり、大殿籠らむあたりにも、忍びてたばかれ」とのたまへば、心して人とくしづめなど、心知れるどちは思ひかまふ」(総角⑤二五一)と、女房たちを味方につけてなんとか大君の寝所へ忍び込もうと画策するのであった。知られるようにこの一件は、薫の侵入を直前で察知した大君が脱出することで、大君の狙い通り薫と中の君とが結ばれそうな展開になるのだが、しかし大君への思いを断ち切れない薫が逢瀬を思いとどまることにより、結局どちらの計画も不首尾に終わってしまう。そして今度は、帰京した薫が匂宮を訪れた場面に「かの、いとほしく、内々に思ひたばかりたまふありさまも違ふやうならむも情なきやうなるを、さりとして、さ、はた、え思ひあらたむまじくおほゆれば、譲りきこえて、いづ方の恨みをも負はじなど下に思ひかまふる心をも知りたまはで」(総角⑤二六一)とあるように、薫の方が匂宮を中の君に手引きする算段をつけるのである。薫の心がすっかり中の君に移ったと信じる大君は、この計画に気付かず匂宮と中の君との逢瀬を許してしまい、「かく思しかまふる心のほどをも、いかなりけるとかは推しはかりきこえたまはむ」(総角⑤二六六)と薫に訴えることになるのであった。中の君をめぐる攻防はこうして決着がつくことになるのだが、最後の用例

は「さまざまに思いかまへけるを色にも出だしたまはざりけるよと、(中の君ハ) 疎ましくつらく姉宮をば思ひきこえたまひて、目も見あはせたてまつりたまはず」(総角⑤二六九) というもので、この結婚計画に関与していると中の君に誤解されることにより、大君の孤立はますます深まっていくことになる。

こうして、中の君と薫を結び付けようとする大君の思惑は実現せず、に終わるのだが、ではこの段階で大君の「心ゆるび」が描かれるのであろうか。次は、匂宮と中の君とが結婚した初日と三日目に交わされた薫と大君の贈答歌である。

・しるべせしわれやかへりてまどふべき心もゆかぬ明けぐれの道
かただたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば

(総角⑤二六七〇八)

・小夜衣きてなれきとはいはずともかごとばかりはかけずしもあらじ

へだてなき心ばかりは通ふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ

(総角⑤二七五)

最初の薫の贈歌に用いられた「明けぐれの道」は、字義通りにはこれから薫が帰らねばならない夜明け前の京への道ということだが、同時にそれは薫の心象風景でもあり、さらに言えば、実父柏木の女三の宮への執着をも想起させる表現だと考えられる。拒まれてもお断ち切ることの出来ない大君への恋心を妄執の闇として詠出する当該歌は主題論的にもかなり重い意義を担っていると考えるが、対する大君はその思いを真正面から受け止めるのではなく、晴らし難

い苦悩の道に迷いそうだとおっしゃるのなら同じく深い苦悩を抱く私たち姉妹の心を思いやってください、と応じるのである。薫の贈歌は無明の闇から逃れるための一筋の光を大君に求めたものであろうが、大君の返歌はその願いとはほど遠いものであったと評さねばなるまい。次の贈歌は薫が贈った衣装の袖に付されていたもので、その衣装に託けて、逢瀬を遂げたわけではないが添臥はしたのだから言いがかりくらいいつけないわけではない、と脅すようなものである。陸奥国紙に実務的な書式で書かれた手紙が添えられていたことから、かなり屈折した薫の心情が推定される。それに対して大君は、隔てのない心の交流はしておりませんが逢瀬を遂げた仲ではありませんので袖を重ねた間柄だなどは口にすまいと思っておりますと詠み返すのである。この返歌は、実事なき逢瀬の際の「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こえは、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」と同発想に基づくもので、心の交流は可能だが肉体関係については拒絶した内容になっている。これらの返歌からは、事ここに至っても大君の「心ゆるび」のあり得ないことが推知されよう。

いったい、薫と大君の関係については、二人の対話が繰り返し描かれることが知られている。その対話場面は、八の宮不在時に訪れた薫と大君が対面したことに始まり、しばらくは社会的な関係が続いていたが、前節末に記したように薫が「つららとち」の和歌を詠み自らの恋心をほめかしたあたりから恋愛関係を前面に押し出したものに変化してきていた。本論ではそれを「心ゆるび」の問題と

して見てきたわけだが、実は両者の関係はこのあたりで再び転換点を迎えるようである。それは、大君の対話と心内語の多寡が逆転することに端的にうかがわれるように、対話そのものの物語内での重要度が低下してくるということであり、逆に言えば、「心ゆるび」しない大君の内面が物語の展開を領導するものとして重要な位置を占めるようになるということである。薫と大君の贈答歌が右の二組をもつて終わるのも、そのような物語の展開に関わる面が大きいのである。⁽¹⁾

四

前掲Iにも「みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ」とあり、その後も「一ところおはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれたてまつりて」(総角⑤二四六)と思つていたように、後見不在ということが、当初大君が薫の求婚を拒んだ大きな理由であった。それは宮家の体面を重んじるということでもあり、大君に一貫した考え方ではあるのだが、匂宮と中の君との結婚成立後はそれに加えて、別の理由が浮上してくることになる。

匂宮と中の君が結ばれたことを喜ぶ女房たちが薫を拒む大君を不審がる場面に続いて、その老女房たちの姿を契機としつつ、大君は「我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば、痩せ痩せになりもてゆく」(総角⑤二八〇)と容姿の衰えを思いながら、

「恥づかしげならむ人(=薫)に見えむことは、いよいよかたはらいたく、いま一二年あらば衰へまさりなむ、はかなげなる身

のありさまを、と御手つきの細やかに弱くあはれなるをさし出でも、世の中を思ひつづけたまふ。(総角⑤二八一)

のである。そして、この思いは九月十日のほどに薫と対面した場面へと繋がっていくことになる。ここでの大君は、薫と対面しながら、Kやうやうことわり知りたまひにたれど、人の御上にてもの思ひいみじく思ひ沈みたまひて、いとどかかかる方をうきものに思ひはてて、なほひたぶるに、いかでかくうちとけじ、あはれと思ふ人の御心も、かならずつらしと思ひぬべきわざにごそあめれ、我も人も見おとさず、心違はでやみにしがな、と思ふ心づかひ深くしたまへり。(総角⑤二八七、八)

と改めて拒否の念を抱くのだが、「我も人も」という捉え方に注目される。大君は、匂宮と中の君との結婚生活を身近に体験し傍線部のような感想を抱くのだが、傍線部が述べているのは大君(我)が薫(人)を見おとす場合であり、ここから直接「人も」が出てくるわけではない。しかしここは、前掲IやJからの心情を踏まえて、(容姿端麗な中の君でさえ匂宮の来訪が途絶えがちになるのだから)もしも自分が薫と結婚したとしても醜い容姿ゆえ薫はすぐに愛想を尽かしてしまうであろう、との思いが前提にされていると読み解くべきところなのであろう。つまり、もし自分が薫と結婚すれば、薫も自分を見おとすことになるし、自分もまたそのような薫の心を「つらし」と思い見おとすことになるというのが、「我も人も」を支える論理なのだ⁽²⁾と考える。大君の死の場面を基点にこのあたりも含めて李夫人(漢書)外戚伝の引用が指摘されているが、大君も

また「色衰而愛弛」と考える女性の一人なのであった。

この思いは、二人の対面場面の最後に「常よりもわが面影に恥づるころなれば、疎ましと見たまひてむもさすがに苦しきは、いかなるにか」（総角⑤二八九）として薫に伝えられ、薫の侵入を拒む理由としても機能しているのだが、後見不在ということとは別に容姿の衰えが拒否の理由として強調されてくるのは、右にも述べた李夫人引用への伏線であると同時に、たとえ零落した現状を受け入れて薫と結婚したとしてもその先に幸せが待っているわけではないことを改めて確認する意味も有しているのだと思われる。

その後、十月に紅葉狩の一件が起きると、大君は「なほ音に聞く月草の色なる御心なりけり、ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、そら言をこそいとよくすなれ」（総角⑤二九八）と匂宮の移り気さや男の言葉の信じ難さを思うようになる。しかし、前掲Kと同じく、ここでも男の心変わりそれ自体に思考の焦点が絞り込まれていくことはない。大君は

L：あだめきたまへるやうに、故宮も聞き伝へたまひて、かやうにけ近きほどまでは思しよらざりしものを、あやしきまで心深げにのたまひわたり、思ひの外に見たてまつるにつけてさへ、身のうさを思ひそふるが、あぢきなくもあるかな、かく見劣りする御心を、かつはかの中納言もいかに思ひたまふらむ、ここにもことに恥づかしげなる人はうちまじらねど、おのおの思ふらむが人笑へにをこがましきこと、と思ひ乱れたまふに、心地も違ひていとなやましくおぼえたまふ。（総角⑤二九八〜九）

と、亡き父宮の賢慮を思いながら、今回の一件でさらに「身のうさ」を加える結果になったこと、またそのために「人笑へ」を招来してしまふことを嘆くのである。⁽¹³⁾そして、「人並々にもてなして、例の人めきたる住まひならば、かうやうにもてなしたまふまじきを」（総角⑤二九九）と、むしろ「例の人めきたる住まひ」ではないこと、具体的には後見不在で零落した自分たち自身の側に、匂宮の不当な扱いの原因を求めていくのである。

このように考えを進めてきた大君が死を願うようになるのは、言わば必然であった。

M我も、世にながらへば、かうやうなること見つべきにこそはあれ、中納言の、とざまかうざまに言ひ歩きたまふも、人の心を見むとなりけり、心ひとつにもて離れて思ふとも、こしらへやる限りこそあれ、ある人のこりずまに、かかる筋のことをのみ、いかでと思ひたれば、心より外に、つひにもてなされぬべかめり、これこそは、かへすがへす、さる心して世を過ぐせとのたまひおきしは、かかることもやあらむの諫めなりけり、さもこそはうき身どもにて、さるべき人にも後れたてまつらめ、やうのものと、人笑へなることをそふるありさまにて、亡き御影をさへ悩ましたてまつらむがいみじさ、なほ我だに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむと、思し沈むに：（総角⑤三〇〇）

生きている以上このような事態を避けられないと考える大君は、薫の誠意を疑いまた女房たちの手引きを憂慮するところから、亡き父

の遺言を絶対的な指針として捉え返していくのである。⁽¹⁴⁾ 続く傍線部「さるべき人」については、これを夫とする説(玉上評釈・新旧全集など)と親とする説(集成・新大系など)とで解釈が揺れている。前者の説が出てくる背景には「後れたてまつりけめ」となっていないことがあるようだが、「さもこそは」が「さもこそはよるべの水に水草ぬめ今日のかざしよ名さへ忘るる」(幻④五三八)のように「さもこそは—め—」という形で逆接の構文を形成する語である点に鑑みれば、「め」を不審視する必要はなからう。幻巻の用例がそうであるようにこれは和歌に多い語ではあるのだが(因みに和歌には「さもこそは—けめ」の用例は認められない)、こども「私たちは不運な身の上で、頼るべき両親にも先立たれてしまったが(それは自らの不運さの問題)、しかし(結婚して)中の君のみならず私までもが世間の物笑いの種になり、亡き親までも悩ませてしまうことになったらそれは(宮家の体面にかかわるゆえ)なんと辛いことか」のような心情の流れになっているのであろう。そしてそう思うところから、せめて自分だけは結婚を回避して苦悩を深める前に死んでしまいたい、と願うようになるのである。

そのような大君にとって、唯一の気がかりは後に残される中の君のことであった。「この君を見たてまつりたまふもいと心苦しく、我にさへ後れたたまひて、いかにいみじく慰む方なからむ」(総角⑤三〇〇〜一)云々と、大君の思考は死後の中の君へと及んでいくことになる。しかし、病臥する大君のところには、さらに追い打ちをかけるように匂宮と六の君との縁談の噂が舞い込んでくる。中の君

の将来はいよいよ予断を許さぬ状況に追い込まれるのであり、これを聞いた大君も「ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、身の置き所なき心地して、しをれ臥したまへり」(総角⑤三一〇)と死への傾斜を強める一方で、その後には届いた匂宮からの手紙に対して「なほ心うつくしうおいらかなるさまに聞こえたまへ。かくてはかなくもなりはべりなば、これよりなごりなき方に、もてなしきこゆる人もや出で来むとうしろめたきを、まれにもこの人(匂宮)の思ひ出できこえたまはむに、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ頼まれはべる」(総角⑤三一二〜三)と中の君に返事を促すように、なんとか打開策を模索するのである。しかしこの説得がさらなる事態の悪化を防ぐ手段として匂宮を利用するものでしかないように、うまい突破口はなかなか見つかりそうにない。

そのような中、十一月になり病氣見舞いに訪れた薫に対し、大君は「心地にはおほえながら、もの言ふがいと苦しくてなん。日ごろ、訪れたまはざりつれば、おほつかなくて過ぎはべりぬべきにやと口惜しくこそはべりつれ」(総角⑤三二八)「よろしきひまあらば、聞こえまほしきこともはべれど、ただ消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにごそ」(総角⑤三二五〜六)と発言するのだが、大君は薫に何を伝えようというのか。明言されていない以上、ことは読者の想像力に委ねられているのかもしれないが、右に見たように中の君の処遇問題に焦点化されてきていること、これら発言の前後には「顔をふたぎたまへり」(総角⑤三二八)「顔はいとよく隠した

まへり」(総角⑤三二五)と明示的な李夫人引用が推定されることなどから、中の君のことを薫に委託せんとする大君像を読者に想起させるべく表現が仕組まれているように思われる。言うなれば、大君の心内を丹念に辿ってきた物語は、容姿を気にする大君に李夫人を重ね、匂宮の夜離れや縁談話を機に死を願う大君を描くことで、その先に中の君の処遇という新たな問題を紡ぎ出そうとしているのである。そして、その到達点が大君臨終直前の薫との最後の対話だと思われる。

N「つひにうち棄てたまひてば、世にしばしもとまるべきにもあらず。命もし限りありてとまるべうとも、深き山にさすらへなむとす。ただ、いと心苦しうてとまりたまはむ御事をなん思ひきこゆる」と答へさせたてまつらむとて、かの御事をかけたまへば、顔隠したまへる御袖をすこしひきなほして、「かくはかなかりけるものを、思ひ隈なきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまりたまはむ人(=中の君)を、同じことと思ひきこえたまへとほめかきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからましと、これのみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおほえはべる」とのたまへば、「かくいみじうもの思ふべき身にやありけん、いかにもいかにも、ことごまにこの世を思ひかかづらふ方のはべらざりつれば、御おもむけにしたがひきこえずなりにし。今なむ、悔しく心苦しうもおほゆる。されども、うしろめたくな思ひきこえたまひそ」などこしらへて……

(総角⑤三二七〜八)

大君への妄執が極まった感のある薫に、大君は自分の代わりに中の君をとそれとなくお伝えいたしましたのにお聞き届けくださらなかったことだけが心残りですと伝えるのだが、それに対して薫が傍線部のように答えたということは、大君の死後、中の君に接近していく口実が与えられたということになろう。こうして物語は、早蕨巻への展開をにらみながら、薫を中の君に再び近づけるべく準備を進めていくのである。

五

最後に、結ばれることなく終わった大君と薫の物語が、宇治十帖においていかなる意義を有するものなのかという点について考えておきたい。言い換えれば、大君の結婚拒否をどう位置付けるかという問題である。

その際注目されるのは、やはりどこまでも「隔て」にこだわろうとする大君の造型であろう。物理的な隔てを介してこそ隔てなき心の交流が可能になるとする大君の思考は、先行作品を咀嚼吸収しながら『源氏物語』が獲得した重要な発想形式であり、この作品を組み上げる主要素材の一つでもある⁽¹⁵⁾。しばしば指摘されてきた第二部の紫の上からの主題の継承ということも含めて、そのような大君造型が重要な意義を担うことは言うまでもない。しかしながら、そこから直ちに愛の永遠化のようなものをここでこの主題として取り出すことには慎重でありたい。

いったい、心惹かれる男にそれでもなお靡くまいとする女の心理

が感動的なのは、たとえば「忘れじのゆく末まではかたければ今日を限りの命とがな」(新古今・恋3・一二四九・儀同三司母)に見られるように、男の心変わりが前提とされているからではないのか。とするならば、問題の大君像は光源氏や匂宮といった男性に対してこそ相応しいものであつて、薫とは噛み合わないということになる。前掲Kなどに見られるごとく、大君は薫が簡単に心変わりするものと考えているようだが、それが薫の正当な評価でないことは物語の展開が証する通りである。

第二節で述べたように、薫像を通して追究されてきたのは男の執着だと考えられる。八の宮の造型を考えてみても、物語が往生を妨げるものとして執着を捉えていることは疑い得ない。それゆえ、問題の焦点は、薫の執着を大君がどう受け止めそれにどう対処するか、という点に絞り込まれていくべきであった。具体的に言えば、男の執着の対象になった女が男の思いを拒めば男の執着はさらに深まり往生の妨げとなるが(女三の宮と柏木の場合)、しかし自らの意志に反して男の手に落ちたとしても真に幸福な生活が待っているとは言い難い(落葉の宮と夕霧の場合)、そういう板ばさみの状況の中で、第三の道が模索されるべきであったということである。大君は「かの世にさへ妨げきこゆらん罪のほど」(総角⑤三二二)、すなわち自らが父八の宮の往生の妨げになっていることには思い至るのだから、それを薫に適応していけば、二人の物語は異なる結末に辿りついていくかもしれない。しかし、述べてきたように大君は薫の執着に真正面から向き合うことはなかった。私見によれば、第二部後

半の光源氏や紫の上は、執着を抱え込む人間を丸ごと「あはれ」と許容するような境地に到達していたと考えるが、大君がそのような「あはれ」を薫に対して抱くことは最後までなかったのである。⁽¹⁶⁾

構想論的に言えば、薫の恋心を徹底的に拒むことによりますますその執着度合いを高めることがこでの狙いであり、右に述べたような課題はその後の展開の中で深めるべく仕組まれていたと考えるべきなのかもしれない。とすればなおさら、大君の結婚拒否のみを取り出して高く評価することは不適切であろう。大君の担う主題は、薫のそれと原理的に噛み合っていないのである。

おそらく、ここに浮舟が登場してくる必然性も胚胎していたに違いない。「もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなん」(夢浮橋⑥三八七)という横川僧都の言葉は、大君と薫の物語では回避された課題への一つの回答であり、女の救済と男の執着という相容れない問題を解くための一つの指針でもあった。しかし、そのような視点を取り込んで物語が織りなされるには、なお多くの紆余曲折が予想される。大君と薫の物語は、そのような長い道程(宇治十帖)の出発点に過ぎないのではあるまいか。

注1 金静照「宇治十帖の方法―薫と大君の恋物語をめぐって―」(『東京大学国文学論集』二〇〇七年五月)は、「見ゆづる」「思ひゆづる」の語は、源氏物語の中で親が他人に子供を託す文脈において用いられる場合、結婚の許可、または親代わりとしての委託の意を示している」と指摘する。

- 2 秋山虔「八宮と薫君―宇治十帖の世界、その一―」(『日本文学』一九五六年九月)日向一雅「八宮家の物語―「家」観念と「恥」の契機を軸として―」(『源氏物語の主題』桜楓社一九八三年)坂本和子「八の宮」(『講座源氏物語の世界』第八集、有斐閣一九八三年)今井久代「宇治八の宮の遺戒と俗性」(『源氏物語構造論』風間書房二〇〇二年)など参照。
- 3 注2秋山論文、原岡文子「宇治の阿闍梨と八の宮―道心の糸―」(『源氏物語の人物と表現』翰林書房二〇〇三年)など参照。
- 4 本論と細部の理解は異なるものの、金盛友子「薫と八宮」(『東京女子大学日本文学』一九八四年三月)が「あくまで道心深さを貫こうとしているようにみえる薫に、法の友としての後見の約束以上のことを期待することは無理だと判断した八宮は、薫に「見ゆづる」ことを断念せざるを得なかった」とする指摘に従いたい。なお、同様の読み取りを示す先行論には、森一郎「薫像の内と外―薫の人物造型と叙述の視点・方法・文体―」(『国文学』一九九三年十月)三谷邦明「源氏物語の言語区分―物語文学の言説生成あるいは橋姫・椎本巻の言説分析―」(『源氏物語研究集成』第三巻、風間書房一九九八年)などがある。
- 5 姫君たちに「見ゆづる人もなく、心細くなる御ありさまどもをうち棄ててむがいみじきこと」(椎本⑤一八四)とも言い置いているように、「見ゆづる人」はとうとう最後まで見つからなかったのである。
- 6 吉岡廣「句宮巻の薫像」(『源氏物語論』笠間書院一九七二年)三枝秀彰「罪の人々―柏木・紫上・薫の罪・宿世・宗教について―」(『論集源氏物語とその前後2』新典社一九九一年)など参照。
- 7 Eについては、「心移りぬべし」は、薫の心中の思いをそのまま地の文にしたものとする「集成」や、逆に「内語文は、薫自身の見解ではなく、語り手が推察したものなのである」とする注4三谷論文の見解などあり分析が難しいが、ここでは傍線部を薫の内語、「心移りぬべし」を語り手の批評と解しておく。
- 8 吉井美弥子「薫をめぐる(語り)の方法」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社二〇〇八年)。
- 9 物語に全十二例ある「明けぐれ」のうち四例が若菜下巻での柏木と女

- 三の宮の逢瀬の場面に用いられている。なお、この語については、高橋亨「源氏物語の内なる文学史」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会一九八二年)など参照。また、大君の返歌中に用いられた「人やりならぬ」「まどふ」という語が、柏木像を呼び込んでくることについては、伊藤博「愛執の薫」(『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院一九九四年)池田和臣「薫の人間造型」(『源氏物語の探求』第十五輯、風間書房一九九〇年)など参照。
- 10 中川正美「宇治大君―対話する女君の創造―」(『論集源氏物語とその前後4』新典社一九九三年)など参照。
- 11 この問題については、井野葉子「大君 歌ことばとのわかれ」(『源氏物語 宇治の言の葉』森話社二〇一一年)吉野瑞恵「隔てなき」男女の贈答歌―宇治の大君と薫の歌―」(『王朝文学の生成』笠間書院二〇一一年)から学ぶところが大きかった。
- 12 藤原克己「紫式部と漢文学―宇治の大君と(婦人苦)―」(『国文学論叢』神戸大学、一九九〇年三月)参照。
- 13 「身のうさ」につき『新田全集』は「自分の思慮が浅かったという自責ないし自己嫌悪の念」と施注するが、「愛し」の語義に照らして従い難い。むしろ、「不仕合せな身の上をひとしお嘆くことになるとは、何と情けないこと。句宮一行に無視されたしがいない身の上を嘆く」(集成)と解すべきものだと思われる。
- 14 沼尻利通「八宮の遺言の動態―「一言」「いさめ」「いましめ」から―」(『源氏物語の新研究』新典社二〇〇九年)参照。
- 15 注12藤原論文、高田祐彦「結婚拒否」の思想」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会二〇〇三年)など参照。
- 16 大君にも薫に対する「あはれ」の用例は認められるが、その方向に思考が深められていくことはなかったと考える。

*本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)に拠った。

(よしだ・みきお 本学准教授)